

生ける水

聖霊による刷新のために

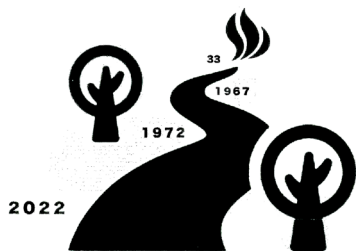
これまででも、これからも、
聖霊に満たされ、導かれ、
ともに歩む

全国コムニオ奉仕会 コーディネーター 小熊晴代

暑いですが。熱いです。我が家は東京都心部から40キロ、海なし県の小さな町にあります。関東の梅雨入りは、聖霊降臨の主日の翌日、6月6日でした。以後2週間、あのお絵描き歌どおりに雨ザーザー降って来て、お祈り散歩の途中でずぶ濡れになり、洗濯物もすすきり乾かなかつたり、という日が続きました。Holy Spirit Rain Down (聖霊雨のように) という歌をよく口ずさみました。ところが21日の夏至の直前から最高気温は連日30度を超え、40度近くになる日も。27日に観測史上最速の梅雨明けが宣言され、観測史上最短の梅雨の季

第22回カトリック 聖霊による刷新全国大会

聖霊に満たされ、導かれ、ともに歩む



節から名実共に夏となりました。この『生ける水』夏季号が皆様のお手元に届く頃も厳しい暑さが続くようです。どうぞご自愛ください。聖霊降臨の主日のミサで歌う『聖霊の続唱』にあるように、「さわやかな憩い」、「暑さの安らい」である方が永遠に私たちと共におられます(ヨハネ14・16)。今年の前半期の新しい状況を振り返ると、日本では、コロナ禍にオミクロン株という世界中で主流となった新顔が加わった第6波と共に新年を迎えました。一日の感染者数と死者数は2月にそれぞれ10万人と三百人を超えてピークに達し、以後は緩やかに下降して6月はそれぞれ1万5千人前後、15人前後で落ち着きを見せていますが、規制緩和の影響で徐々に増加の傾向も見られます。この第6波のピーク直後、2月24日にロシアがウクライナへの軍事侵攻を開始しました。こちらも世界に様々な形で暗い影を落としたまま続行されています。

このような二〇二二年に、「カトリック聖霊による刷新 (Catholic Charismatic Renewal)」とこう恵みの潮流が初めて日本に流れ込んでから50周年を迎えています。

☆ 目 次 ☆

- 「これまででも、これからも、聖霊に満たされ、導かれ、ともに歩む」(小熊晴代) 1
- 聖霊刷新 50周年を振り返る〔特集2〕 3
- 奈良地区からの報告と証し
(吉田顕朋+集いメンバー)
- 聖霊による刷新と私
(裕恵美子、米原健、蓮沼裕子)
- 刷新との出会いから
(大橋せつ子、益田典子、榎谷節子)

発行

聖霊による刷新

全国委員会

編集委員

中村友太郎
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021
東京都品川区上大崎2丁目
10-34-2-312

聖霊による刷新全国委員会
Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878
口座名 聖霊による刷新全国委員会

す。第二バチカン公会議閉会から1年余の一九六七年、米国の小さな黙想の家で、30名足らずの大学生と指導者が、『使徒言行録』2章に描かれている最初の聖霊降臨と同じように聖霊の愛に満ちた臨在と力強い御業を体験しました。ここから湧き出た「生ける水」は恵みの潮流となつて数年で世界中に広がり、5年後の一九七二年には日本に到達しました。同年10月にペンテコステ派の牧師一行がカナダから、二人のカトリック修道女が米国から、ほぼ時を同じくして聖霊に導かれて来日し、日本在住の数人のカトリック司祭、修道女、信徒が聖霊による洗礼を体験します。1ヶ月後の11月には、日本語による祈りの集いが初めて東京大司教区の初台教会で行われ、22名が参加しました。それから半世紀、全国各地で大小様々な集いや交流を通して、多くの人々が聖霊に結ばれて新たに生き成長する恵みを体験してきました。

この節目の年に、これまでの

聖霊による導きと神の恵みを思い起こし、これからさらに聖霊に導かれて教会とともに歩み続ける祝福を祈り求めるため、対面式の集会としては3年ぶりに、第22回全国大会を8月27日（土）と28日（日）に開催します。55年前に米国で湧き出たこの恵みを受けた世界中の人々に奉仕するカリス（CHRIS）がいのち・信徒・家庭省（6月5日発効の教皇庁再編成に伴い日本語の名称は「信徒・家庭・いのちの部署」から変更）の指導下で二〇一九年から法人格を持つ団体として活動しています。このカリスとつながって二〇二〇年に新たに発足した全国コムニオ奉仕会が主催する初の全国大会となります。（印刷された案内が入手できない方は、カトリック聖霊による刷新特設サイト <https://crtjapan.net/category/information/> を閲覧してください）。

会場は、これまでも関西大会や全国大会でお世話になってきた、都ホテル尼崎です。新型コ

ロナウイルス感染対策を最優先させるため、参加者の定員を従来の約半数の一七〇名とし、開催期間を1泊2日と短くし、行動範囲をホテル内に制限するたため参加者全員が原則として同ホテルに宿泊し、マスク着用で集います。海外から講師を招かず、この50年の間に聖霊が結んでくださった多くの実りを国内外から様々な人々に対面もしくはビデオメッセージで証していただきます。

テーマは、「聖霊に満たされ、導かれ、ともに歩む」です。コアグループで祈っている時に与えられた2箇所の御言葉が凝縮されています。「霊の導きに従って歩みなさい。（……）わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」（ガラテヤ5・18〜25）。「天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があつて、年に十二回

実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す」（黙示録22・1〜2）。また、カリス発足時に教皇フランシスコから提唱された三つの分野で愛の証し人となる使命を言い換えたとも言えます。（1）聖霊による洗礼（＝聖霊の満ちし）を教会の全ての人と分かち合う。（2）キリストの体である全教会の一致に仕える。（3）貧しい人々や霊的肉体的に助けを最も必要としている人々に仕える。今年6月4日にカリスが主催したオンライン聖霊降臨徹夜祭では、オーストラリア、ブルキナファソ、レバノンからまさにこのような証しがなされました（カリスのユーチューブチャンネルから録画を見ることができます）。日本に住む私たちを聖霊はどのように導いておられるでしょうか。来年二〇二三年に開催されるシノドスと共に、文字通りキリストの体である教会と共に歩みましょう。キリストに結ばれている異なる伝統に生きる兄弟姉妹と共に歩

みましよう。共に歩む誰かを必要としている兄弟姉妹と共に歩みましよう。

お気づきになったでしょうか、今年1月2日付カトリック新聞に、「カトリック聖霊による刷新全国コムニオ奉仕会」として初めて新年の名刺広告を掲載させていただきました。3人の司教様の叙階を祝う広告にも毎回加えていただきました。また、本誌春季号でもお伝えしたように、3月20日に行われた四旬節オンライン賛美の集いでウクライナ危機人道支援のための献金を呼びかけて集まった総計30万

円をカリタスジャパンに送金することができました。これも「ともに歩む」ことのささやかなしるしと思っています。

冒頭で今年前半期に立ち込めた暗雲について述べましたが、6月末には米国から一筋の希望も射し込みました。連邦最高裁が、人工妊娠中絶を合衆国憲法上の権利として認めた一九七三年の「ロー対ウエイド」判決を覆したのです。誌面の都合でここでは詳細を述べることができませんが、この判決が下されたのは6月24日、イエスのみ心の祭日でした。この祭日のために

今年是一日早い23日に洗礼者聖ヨハネの誕生の祭日、25日は聖母のみ心の祝日、と続く「祝福された家族の聖なる三日間」(私の造語です)に、またバチカンで「『愛のよろこび』家庭年

」のフィナーレとして第10回世界家庭大会が開催されていた間に、受精の瞬間から人間の生命を守る希望の光が射し込んだことは、決して偶然ではなく、イエスと聖母のみ心に忠実にとどまって50年間祈りと行動をつなぎ続けた神の家族の勝利だと思えます。

主イエス・キリストの復活か

わが国における聖霊による刷新

五〇周年を振り返って (特集・その二)

奈良地区からの報告と証し

登美ヶ丘教会

アンデレ吉田顕朋

わが国の聖霊による刷新の金祝に先立ち、奈良県の登美ヶ丘(聖霊)教会は、二〇一八年十

一月に創立五十周年記念をお祝いいたしました。

(1) 聖霊刷新との出会い

聖ヨハネ・パウロ二世が来日された一九八一年、マリスタ会の主任司祭トニー・グリーン神父様から家族四人で洗礼のお恵み

をいただきました。神父様は聖霊刷新の日本代表の一人として、

ローマの世界大会に出席され、

世界から癒しや色々の賜物を持った司祭やシスター方を日本に招き、全国司祭黙想会をしておられました。私達はその案内状

ら50日後にエルサレムの高間で起きた最初の聖霊降臨を体験したのは、使徒たちとイエスの母マリアを含む一二〇人ほどでした。この全国大会の参加者も小さな群れとなるでしょうが、集められた人々で一日足を停め、これまで受けた祝福について主に賛美と感謝を献げましょう。そして、翌日には新たにされて聖霊の示す場所に遣わされ、福音の喜びを証しましょう。最初の聖霊降臨が起きた地上の都エルサレムとやがて来る天の都エルサレムを思いつつ、「都ホテル」でお待ちしています。

を発送するお手伝いをして、燃えておりました。当教会にも講師の方が来られたので、身近にごミサや癒しの集いに与るお恵みをいただいております。

(2) アメリカにて

一九八七年シカゴに転勤になり、教会に転入したところ、カリスマ的な祈りの集いがあるのを知り、参加するようになりました。ある婦人から「なぜこの



なつかしきトニー・グリーン神父様

グループに参加したの」と聞かれ、英語もおぼつかない妻が参加したことを不思議に思われたのでしよう。

トニー・グリーン神父様の活躍と、日本での集いの話をしたらすぐに納得していただいたようです。毎週の集いとは別に、その教会では特別な賜物のある方の癒しの集いが時々開かれていました。当時アメリカは聖霊刷新に燃えていた時だったのです。講師の按手の祈りで次々と倒れていく人を見て、大変不思議に思ったことがあります。その後カリフォルニアに転勤になり、カナダのシスター・ユニーンの集いに参加した時に異言の祈りによって、私はお酒が飲めなくなるお恵みをいただきました。

(3) 日本での歩み

一九九三年アメリカから帰国しましたが、一年後にグリーン神父様が六十八歳で亡くなられました。一九九五年、アフリカで活躍されたいたオーストラリアのジャック・ソルスビー神父様

に誘われ、セントルイスの世界大会に参加しました。その時ご一緒したアン・ブレントンさんが講師として一度、神父様が二度大会に来日され、再会できたことは大きな喜びです。その後メリノール会のケビン・ハンロン神父様と新しい賛美が始まりました。また、パウロ・グリーン神父様が時々来日され、セミナーや黙想会が開かれ、各地からの参加者が増えていきました。また、平井雅子さんのギターにより、霊性豊かな賛美に導かれて行き、今日に続いていきます。そして二〇一一年東北大地震の時に、富雄教会では畠神父様がセミナーを開催され、大きな霊的成長の糧となりました。

(4) コロナ前と将来への望み

二〇一七年、パウロ会の赤波江神父様を当教会にお招きして、聖霊生活セミナーを二回ご指導していただきました。続いて、岡園優子さんの経験豊かなリーダーシップのお蔭で、月一回ごミサと講話をコロナ発生時まで続けることができました。

〔集いのメンバーの証し〕

A. コロナが始まってから、皆でオンラインのZOOMやLINEグループを活用するようになりました。そこでグループ内でロザリオをすることも増えました。今私達は聖霊によって豊かに飛躍し、全く新しく力強い足固めをしています。

フランチェスカ 丸山和恵

B. 幼児洗礼の私が四十年近く教会共同体から遠ざかり、連れの葬儀をきっかけに再び呼び戻されてから十数年が経ちました。朝ミサの後、何もわからないままミスター吉田に手を引かれて行ったのが「登美ヶ丘祈りの集い」でした。その後、半年以上賛美を続けながら、毎週の分かち合いでは涙を流し続けました。スポンジが水を吸って行くように私の霊的飢えと渴きは癒されて行き、聖霊が私のうちに騒々しく活発に働いてくださったと信じています。

マリア・アンジェラ平井雅子

C. 夫が落選、失業。途方に暮れていた時に「祈りの集い」に参加すると、暖かな笑顔で迎えられ、話をうんうんと聞いてくださった当時のリーダーの吉田顕朋さん。長い海外経験があり、結婚生活の半分を海外で過ごしている私の話に共感してくださいました。

マリア・ローザ 大野晶子

D. コロナ禍でのスマホに感謝。精華教会はラインでの祈りの集いを月2回開き、更に今年一月から、あるブラザーの病氣回復のため毎日（早朝、昼、夜）好きな時に参加出来るロザリオを各地の教会の方々とグループラインで祈っております。また2月24日からロシアのウクライナ

の終結を願っています。聖霊が働いて下さっていることに感謝！ 主に賛美！

マリア・ローザ 高田恭子

E. 五十周年、イエスさまありがとう！ 十数年前、「祈りの

集いに参加しませんか。」あなた、奈良の委員になってくださいね。」当時心の平安を渴望していた私は、優しくも確かなお誘いがうれしかった。心が弾んだ。今、聖霊に導かれ共に歩んでいることを心から感謝している。この道には、イエス・キリストのやさしさと温もりが満ち満ちている。時々、「お兄ちゃん！」と呼ぶ。イエスさま、本

当にありがとう！ ハレルヤ！
— これからも、聖霊と共によろしくお願いします。

ルチア 岡園優子

聖霊による刷新と私

大分・明野教会 碓恵美子

一九九二年の秋に私はお聖堂で一人跪いて祈っていましたが、そこへ主任司祭が現れ、「十一月福岡の黙想の家で祈りの黙想会がありますから、行ってみなさい」と言われて、初めて黙想会というものに参加しました。

その二年前に東京で改宗したばかりでしたので何もわからない

ままでしたが、非常に心地よいものでした。

ご受難会のマテオ神父様はとても温かく、初めての参加者である私のために椅子を用意してください、私のために全員で祈ってくださいなのです。それが異言であるとは気づきませんでした。天使たちの合唱のように心が揺さぶられました。これが、聖霊による刷新との最初の出会いでした。

翌年の三月再び黙想会があり参加しましたが、告解の後のお聖堂では祭壇に御聖体が顕示され、思いがけないことに、私の心に大きく響く声が聞こえたように思われたのです。それはとてもはっきりしていて「わたしの前には、誰も偉くはなく正しいものもない」でした。

幼い頃からイエス様はいつも私の心の中におられたように感じていましたが、讚美歌が好きだということと結婚後十数年たったある年の暮れ、寂しさや何か虚しさに押されて教会を訪れ洗礼を受けましたが、次の春に

は東京への転勤であまり関わることなく、探していた教会にやっとたどり着いたのです。

神言修道会の神父様は、私の話を根気よく聞いてくださったのがとてもうれしく、一年間ごミサに預かりなさい。そうすれば、ご聖体もあげましょうと言われ、日曜日には私は嬉々として朝のごミサに通うようになったのです。けれども、それは、同時にとても危うい時期でもあったように思います。

子供たちは三人、そして夫を残しての日曜の貴重な朝の団欒を抜け出していたのですから。それでも一年間はあつという間に過ぎご復活を数日後に控えながら、四月の大分への転勤が迫っていたことで、神父様は心優しいお年寄りの代母さんを立ててください、やっとな当のカトリック信者となったようでした。そして初めての黙想会というのが、聖霊による刷新の集いだつたというわけなのですが、心の奥底から湧く落ち着いた喜びを手放さない方法としての、小

さな賛美を歌うことを中心にした分ち合いのあるグループにも出会えたことはお恵みだったと思います。

ここにやはり大切なことがあるように思います。それは、人々との繋がりを通してこそ神様は私たちに語り掛けてくださるとの確信です。

聖書を読みますが、たった一人で読むのではなく数人で同じ個所について自分はこう感じたという感想を静かに聞いてもらうことです。人数分の感想が一人ずつ異なることのうちに心に響く感想に出会うことの大切さを自分のものにできるのです。決して討論や教義についての話にはせずに！ すると不思議な納得と喜びがじわじわと生まれ一人一人の思いが述べられた後、次第に全員がその気持ちをもったまま神を賛美する歌に引き込まれて行きます。これは、ごミサとは違いますが、旧約聖書で垣間見る、会衆が一つになったように賛美したとの事態に似ているかもしれません。

現在三回目のコロナ禍における四旬節に入っていますが、何とかこのような形で小さなグループによる賛美の集いが難しくない形でできるようにと切に願っています。私自身は三十年目になるのですが少しづつ神様の私への個人的なみ旨というようなものもわかってきたように思います。そして微かな囁きである聖霊の声にも、そうですねと従うことが難しい事ではないようになりました。祈りも賛美も声に出してみたいと思います。そうすると落ち着きと小さな喜びが訪れるのですから。そして思いもかけない豊かな人生が育まれてきたのを確信しています。「神は愛」を最後の一息まで信じていきたいと願っています。

聖霊による刷新との出会い

東京・四谷の祈りの集い

米原 健

私が聖霊刷新に関わり始めたのは一九九〇年の六月でした。この頃、私は故マシー神父様の

祈りのグループである上智大学での「木曜会」に参加していました。ここでは主に学生たちが神父様と共に賛美やミサを捧げていました。この木曜会には、長年のあいだ聖霊刷新に携わっていた故太田逸子さんも参加しておられ、彼女から「四谷の集い」にも誘われました。一年後の五月のことでした。

初めて四谷の集いに参加した時のことです。私はその賛美の素晴らしさに魅了されました。さらに賛美の途中に出てきた「

異言」にも感動しました。そしてこの年の夏に関東大会に参加し、さらに十一月に洗礼の恵みを受けました。この時に私は四谷の集いの「聖霊生活刷新セミナー」に参加しており、「洗礼」だけでなく「満たし」と「堅信」の秘跡も同時に受けました。この頃は自分にとって何もかも新鮮に感じられました。

その後、四谷の集いに毎回参加するようになりました。四谷の集いは年齢も境遇も様々な方々が参加しており、クリスチャ

ンとしてまだまだ未熟な私を励まし、時には祈ってくださいましたこともありました。時に関東大会や全国大会などに参加し、様々なお恵みをいただくこともありました。

中でも素晴らしいのは、何かあった時に皆で祈ってくれることです。四谷の集いに通い出したのは大学生の頃でしたが、社会人になってからも引き続き参加を続けました。特に職場で様々なことがあり、その度に皆に祈ってもらったことが多々ありました。

私の職場では今、精神疾患で休職している同僚がおります。私もこういう状態になるのでは、と思うときがあります。

普通、悩みやトラブルがあった時には友人、知人に相談することがありますが、たとえ友人や知人に相談しても、結局は自分で行動を起こさなければならぬ時があります。でも、その時にはやはり不安がつきまとうこともありまう。人間というのは本当に脆い存在で、こうい

う時にこそ「神様」に縋りつくのが、私たちにとって励みとなります。私の場合、何かあった場合には、集いの人たちが祈ってくれ、助けてくれたことがよかったです。そういう意味でも、もし自分に聖霊刷新がなければ、今頃は挫折していたかもしれせん。

祈ってもらうだけでなく、「聖霊とは何か」「イエス様とはどういうお方か」などに興味を持つようになりました。そこで、聖霊やキリストに関する本も読むようになり、また、聖書も毎日読む習慣も付きました。さらに「生ける水」という小冊子も読むようになり、聖霊刷新に携わっている方がどういう活動をしているかなどを把握するようにもなりました。私も時間があれば、様々な活動にも関わってみたいと思いました。こうして、四谷の集いに参加すると共に、霊的読書もするようになりました。

しかし、三年前に新型コロナウイルスの感染拡大防止のため

に四谷の集いが中止になってしまいました。これから四谷の集いがあるのだろうと心配することがあります。でも、神様は私たちにじっくり祈りの時を与えているのではないかと、前向きにとらえています。

ミサはおかげさまで、地区別、時間別ですが、私の所属教会はミサを公開しています。ミサはできる限り参加しています。教会も、一日でも早く通常の時間帯のミサができることを祈っています。

もし四谷の集いが再開しても、仕事の都合で毎回出られないかもしれません。でも、あと四年で職場を早期退職する予定なので、それからは四谷には頻りに顔を出すことができ、思いっきり賛美ができることを願っています。また、四谷の集いをリードしていけるようになりたいです。

でもその前に、やはり一日でも早く、四谷の集いが再開することを願う今日この頃です。

聖霊による刷新の集いと私

東京・麹町教会

蓮沼 裕子

私が四谷の祈りの集いに初めて参加したのは、およそ三十七年前の春だと思う。上智大学内で開かれていた木曜会でクリスマス・イヴに受洗の恵みをいただき、あなたは洗礼を受けのだから、聖霊の満たしを受けなさいと故マシー師に言われるままに、集いに参加した。また、木曜会を紹介されたのも、共同体を求めてめぐりあった集い、マシー師と太田逸子さんが取りまとめた水曜会にたまたま参加したことが機縁であった。

私は受洗前に既に、御父と主キリストと聖霊に出会う恩寵を受けていた。ただ、一人で充足して、教会とは距離を置いていた。恵みに比例して、悪霊の攻撃が凄まじかった。そのうち試練を与えられて、私は衰えていった。そして最終的に辿りついたのがカトリックだった。当時の四谷の集いは、霊の働

きがダイナミックで愛なるペネウマが皆をひとつにしていた。

マシー師、シュナイダー師、マッコイ師、ヘーシベック師、川村師、その他の聖職者の方々が参加していた。また、故伊藤芳雄さんも記憶に残る方だった。

あと臍臓ガンで亡くなった雨宮さんも忘れられない。リーダーシップにおいて際立っていた。

そして多くのメンバーがカリスマをいただいていた。私がこのような刷新の全盛期に身をおけたのは、幸運であった。

大会には白柳枢機卿様が度々ご参加くださっていた。ケルンホールや暁星の講堂で、フォコラーレやエマヌエル共同体などの諸団体と一緒に会した「聖霊の翼」の集いも忘れられない。苦い経験もあったが、当時は主の導きやご臨在がとてもしっかりした。ルルドでの強烈な神秘体験が核になり、集いで音楽奉仕をしたり、数々のメッセージも受けた。その間、集まる場所は上智大学7号館↓上智会館↓サンパウロなど、会場を転々とした

します。ミサの中で母が途中で立って行列に加わり、戻ってきて私の隣に座っているとときに、「お口に何が入っているの」と聞いていました。確かに何か大切なものが入っていると、そう感じていました。今思うと「ご聖体のイエス様」です。初聖体では教会の庭でベールをかぶった四年生の私が写真に写っています。毎週土曜日に家族で、教会に住んでおられた伝道師さんから神様のお話を聞きました。それには学校の友達を誘って参加して行きました。今になって思えば、福音宣教をしていたのですね。

形で大学生生活が終わりました。それからだんだんと教会の青年会と関わるようになり、長崎のイエズス会の黙想の家に皆で行きました。その指導司祭の神父様からは毎月の黙想会に参加するようお招きがありました。私は会社勤めではなく、ある意味自由業(ピアノの個人レッスン、音楽教室、保育園、幼稚園のリトミック、宗教の話の講師)でしたから、毎月「黙想の家」の二泊三日、三泊四日の黙想にも参加することができました。二十代の終り頃から毎朝のミサにも参加して行きました。一九七九年九月に、ミサが終わってから若い助任司祭が来られ、朝ミサに参加した信徒六、七名の頭の上に手を置いてお祈りされました。それが毎朝続きました。今思うとそれは、堅信の秘跡の時に司教様が受堅者の頭に手を置いてお祈りする按手でした。後で聞くと、コロンバンの神父様三人が聖霊の満たしを受けて、これは信徒のために必要だと判断され、聖霊セミナー

ーを始めることになったのです。そのため、コロンバン会で初めてオーストラリアで「聖霊の満たし」を体験されていたマツケイ神父さまが、管区長様の命令で熊本にセミナーを開くために来られたということでした。その一週間後に聖霊セミナーが開かれ、約七十名の信徒が参加しています。私は別に変わったこともなく、毎日を過ごしていましたが、翌年の一月に、熱海のホテルで聖霊刷新の大会がありました。熊本からも数名が参加し、いまだかつて経験したことのない「賛美の集い」を初めて体験しました。

局からフィオ神父様も来られました。私はブルネイのシスターと同室でした。ヨハネによる福音書の長い文章を英語で分かち合うということで大変緊張しました。けれども、小グループの中のインド人の方で日本にも来たことのある方が、「ここに居るのは皆あなたの兄弟姉妹です。何も緊張することないです」と仰ってくださいました。今思うと、本当にイエス様を信じる方々と一緒に神様に賛美と感謝を捧げる素晴らしい集いに招かれたのだと思います。

どうして私が選ばれたのか？ただただ感謝です。それからは聖霊のお導きで、毎朝のミサだけでなく、毎日の生活でも「主は今生きておられ、わがうちにおられる。」賛美の歌が絶えずなく湧き出てきます。典礼聖歌や他の歌も、これはみな「生ける水が川のように流れ」溢れ出て神様を賛美しています。聖アウグスティヌスが仰っているように、歌うことは二倍の祈りになるということを日々実感して

います。

今までにたくさんの方に出会いました。その方々の信仰そして愛、これから私も信仰・希望・愛を分かち合いながら、賛美の歌を心の中でも声に出しても、続けていきたいと思えます。有難うございました。感謝と賛美のお祈りのうちに。

どこから来て、どこへ行くか

を知らない

東京・四谷の集い

アグネス榎谷節子

聖霊の祈りの集いに出会ったのは半世紀も前のことになるので、記憶はうる覚えです。大学生時代に、母に誘われて、初台教会で行われていた聖霊の集いに参加していました。オーストラリア人の年配のシスター・ジュリアンによるイキイキとした力強い伴奏で賛美を思い切った歌っていましたが、その頃の歌は今でも体に染み付いています。リーダーの一人伊藤芳雄氏の自宅を訪問し指導していただいたこともあります。異言が口に登



草創期の思い出から

ってきたのは夜、休もうと横になっていて時でしたので、とてもリラックスしていたと思います。

清泉女子大学を卒業し、専攻のスペイン語を磨くため奨学金を戴いて、マドリッド大学に一年間留学しました。スペイン滞在中、聖霊の集いに参加する機会はありませんでしたが、その頃から「アツバ、アツバ」としきりに口から溢れる祈りがありました。これは確か、イエスさまが御父に呼びかけていらした言葉ではなかったか、と何となく

御父に呼びかける親しい言葉だと分かっていました。また、「フィリア、フィリア」とも口に登りました。四十五年後、ラテン語を学んだことのある友人から、それは「娘」という意味だと言われ、はつきりしました。不思議にも、初めから「娘」という意味ではないかと直感していたのです。教えでは、神様は御父であり、私たちはその子として下さっていることは知っていても、実際に娘として祈れることは大変嬉しいことです。帰国後、駐日中米エルサルバ

ドル大使館に奉職しました。その傍ら年頃でもあるので、結婚の話が持ち上がりますが、なかなか決まりませんでした。神奈川県で過ごしていた高校時代、親の転勤のため私は保土ヶ谷区にあるエスコラピアス修道会が経営する女子寮に残されました。ある時、寮のお世話をしてくださっていたスペイン人のシスター・エウラリアが私を呼び、「あなたには召命があるでしょう？」と言われ、私は飛び上がりました。即座に「私は普通に結婚します」と断固反対しました。けれど大学を卒業し、結婚の話が持ち上がってくると、私の考えとは別に、心の中で「違う、違う」と声がするようでした。困った私は、いろいろ探している内に、ある宣教会を試してみることになりました。そして不思議なことにとっても幸せに感じたのです。それから一切、聖霊の集いとかかわりは無く、四谷の集いで再合流するまでおよそ三十五年かかりました。けれども、聖霊の満たしを受けてい

たのと、いないのでは、この年月は全く違うものだったと思います。

聖霊ご自身が私を導かれ、八年後には南米ペルー、続いてUSAへと、宣教の路のりを歩むことになりました。ペルーには、一九八九年から一九九一年に滞在しました。九十年代はテロ活動（毛沢東思想）が最も激しい時期であり、また五年間で二百倍のインフレに陥った大混乱の中にありました。派遣先のアマゾン、イキトス市にいた時のことです。バナナ一房が一晩で三百インチ（当時の貨幣単位）から七千インチへ値上がり、果物の宝庫アマゾンにしながら手が出ませんでした。このような社会情勢の中で、少人数で構成された基礎共同体がカトリック教会に散りばめられ、みことばを中心として信徒たちは困難に立ち向かいました。やがて権力者と富者側にあった教会は、貧しい人たちの側に立つ教会へと変わったのです。この出来事をイエズス会の岩島忠彦神父様は、

現代の奇跡だと言われます。私の体験では、基礎共同体に関わっている人々は誰一人、大層なことをしているという構えたところは無く、素朴にひたすらみことばについて行く草の根運動の日々を過ごす人たちでした。

二年を経て、一旦帰国ということになりましたが、ローマの本部に立ち寄った際、USAで勉強することを勧められ、派遣先が変わってしまいました。勉強不足ですから、受け入れないわけにはいきません。

さて、後に一九九六年十二月、丁度日本に帰国した折、在ペルー日本大使公邸占拠事件が起きました。革命運動MRTAが、天皇誕生日祝いのレセプションを行っていた公邸を占拠したので、人質は六百人に及びました。ペルー特殊部隊の突入により救出されたのは、四か月後の一九九七年四月でしたが、随時解放されて、残る七十一人がこの時救出されました。このニュースを見た両親は「こんな恐ろしい所にいたのか」と震え上が

っていました。私が入質になったわけはありませんが、隣りにテロリストがいても不思議はない、と言われていた社会状況の中にいましたから、護られ過ぎしてきたのは聖霊の力のお蔭としか言いようがありません。

ニューヨークではイエズス会系のフォーダム大学で、宗教教育（Religious Education）の修士を死に物狂いで終え、また、同僚たちともよく楽しい時間を過ごし、その間イスパニック（スペイン語系）共同体に関わっていました。場所は移民が多く、トラブルが多いけれど下町の温かさもあるブロンクスでした。論文のテーマは「USAでのイスパニック共同体の司牧について」です。にもかかわらず、その後日本に帰国。長上たちとの対話の不足は大変残念な体験となりました。

今は、信徒宣教会「バンクラールレVan Clara」に入り、イグナシオ教会のイスパニック共同体に所属しています。聖霊の風に乗って日本に派遣されてきた

のですね。

帰国途上、ハワイ上空あたりを飛んでいる時、乗務員さんに日本語の新聞を頼んだら、「あっ！日本人でしたか！」と言われるほど私は、すっかり様々な文化のミックスになって人の目に写っていたようです。けれども、半世紀前に聖霊の満たしていたいただいたミッシヨナリーとしてのアイデンティティは、そのまま私の中で少しも変わっていません。いろいろな事がありました。いつも私を引っ張って下さっている聖霊に「ありがとうございます」と言う、前を行かれる聖霊はくるつと振り返り、嬉しそうに、ニコッ！とされる。これからの展望は？と聞かれると、「どこから来て、どこへ行くかを知らない」（ヨハネ3：8）というみことばの通り、今までそうであったように、これからも何処へどのように導かれるか分かりません。ただ主の声を聴く耳と、業を見る目を持つことができますように、と祈ります。アーメン。